

# 釧根地域将来像検討委員会 第2回委員会議事録

日 時:平成18年4月25日(火) 15:00~17:00

場 所:釧路プリンスホテル 3階北斗の間

## <次第>

1.開 会

2.委員・アドバイザー紹介

3.議 事

(1) 第1回委員会の論点整理

(2) 地域の現状及び課題について

(3) 釧路・根室地域が目指すべき将来像について

(4) 討議

(5) その他

4.閉 会

## <配布資料>

資 料 1: 第1回委員会論点整理

資 料 2: 釧路・根室地域の現状と目指すべき将来像

資 料 3: 社会資本のサービス等の状況

資 料 4: P I (パブリック・インボルブメント) について

資 料 5: 今後のスケジュールについて

参考資料1: 第1回議事概要

参考資料2: 国土審議会北海道開発分科会基本政策部会関連資料

**事務局（釧路開建）** お待たせいたしました。只今から釧路地域将来像検討委員会を開催いたします。本日進行を務めさせていただきます、釧路開発建設部の田中と申します。

本日の委員会は、17時までの2時間を予定しておりますのでよろしくお願いいたします。

それではまず資料の確認をさせていただきます。お手元の次第に従いまして、資料が1から5まで、参考資料が1と2となっております。また、その他に名簿、座席図、行木委員のコメントと道庁さまの新しい総合計画の策定に向けた考え方を添付しております。資料の不足等ございますでしょうか。ございましたらお知らせいただきたいのですが、よろしいですか。

次に委員をご紹介します。今回は行木委員がご欠席となっております。また三膳委員も急遽ご欠席となりましたことをお知らせいたします。

今回は、前回ご欠席されました室蘭工業大学の田村委員にご参加いただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

次にアドバイザーにつきましては、人事異動等により変更がございます。本日お配りしました名簿により、ご確認とご紹介とさせていただきますので、悪しからずご了承いただきます。それでは、以降の議事進行につきましては小磯委員長よりお願いいたします。よろしくお願いいたします。

**小磯委員長** それでは、第2回になります釧路地域将来像検討委員会、これより議事に入っていきたいと思っております。

第1回は2月の22日でしたか、そこではこの検討委員会、これからのこの地域の発展に資するための将来像を探るといふ、特にその中でも、社会資本整備のあり方というところを念頭に置きながら、そのためにどういう地域づくりを目指していくのかというところで、少し基本的なご議論を、メンバーそれぞれ忌憚のないご議論をいただきました。

今日はこのご議論をふまえた上で、これは全体確か4回の予定で、この地域における社会資本整備というものを、少し今後につながるかたちのものをどう出していくのかというところを狙いながら、少し収束をさせていただきたいというのが、今日の第2回の狙いでございます。

したがって、今日は議事のところにもありますように、前回の第1回の皆さん方からご議論いただいたところを論点整理というところで、少し抽出していただいて、問題点を整理していくというところ、そちらをふまえて今後は釧路地域の目指すべき将来像というものを、いくつかの視点で、括っていただいて、この考え方みたいなものを少し事務局の方で整理をしていただいて、それをご説明いただく。

これは、少し今日の大きな議論のテーマになるということで、あわせてそれに関連する参考資料、なかなか第1回の参考資料もそうですけれども、手間をかけて今後のご議論につながるいい資料をつくっていただいておりますので、それを簡単にご紹介いただくということで、その話ご説明を聞いた上で、皆さん方からご意見、質問も含めて結構ですけれどもいただければと、今日の進行をイメージしておりますので一つよろしくお願いいたします。

それでは事務局の方から、資料説明一括してお願いできますでしょうか。よろしくお願いいたします。

**事務局（釧路開建）** 釧路開発建設部次長の参鍋でございます。座ったまま私の方から論点整理と2番目の現状と課題、目指すべき将来像についてご説明いたします。

まず論点整理でございますが、資料の番号1番でございます。第1回で主に地域の現状でありますとか、課題でありますとか、そういった部分をご議論いただきましたので、それについて論点ということで、皆さんの意見を意義のあるといいますか、そういうかたちで、まとめさせていただいております。

まず全般的な意見につきましては、人口減少に対応した地域社会といたしまして、圏域でありますとか、地域社会のあり方についての意見がございまして、1ページの下段のところ、四角で囲ったところがございまして、ご説明させていただきましても、人口減少を見据えた地域のランドデザインの構築が必要であるという意見でありますとか、そのために選択と集中による地域構造の再構築が必要である、また生活者のニーズ、視点から既存インフラの活用を図る必要がある等々の意見があるということでございます。

人口減少による影響ということにつきましては、2ページですけれども、人口減少は、人口のというよりも、人材の過疎化につながる懸念ですとか、各産業の担い手の減少にも進んでいくのではないかというような意見がございました。

地域社会等を支える仕組みづくりということに関しましては、人口減少に対応いたしました人材の育成と確保が必要であると、観光振興や新たなビジネスの創造のために、情報基盤の充実が必要であるとの意見がございました。

食産業の振興につきましては、担い手不足に対応した1次産業の振興というかたちで、担い手不足に対応した、法人化でありますとか、効率的な産業構造の構築が必要であるといった意見が出されております。

自然環境等と調和した産業振興ということで、3ページでございますけれども、自然環境と調和した地域産業の振興が必要でありますとか、生産活動と景観等、これは誤字でございますけれども、観光振興と調和させる仕組みづくりが必要との意見がでてございます。

また観光の振興というテーマにつきましては、地域特性を活かした観光の振興という観点から、4ページになりますけれども、団体観光でありますとか、個人観光というような多様なニーズ、旅行形態に対応した観光振興を目指すべきであると、自然環境と調和し、産業活動等と連携した観光振興を目指すべきであると、地元の安心・安全で質の高い食の提供や観光資源の発掘等による観光振興が重要であると、観光振興のために道路の定時性、高速性を確保・向上させる必要であるとの意見がでてございます。

国際化等への対応につきましては、海外観光客の増加に対応したインフラ整備や学校教育が重要であると、多様なニーズに応えるための情報提供を図る必要あるとの意見がでてございます。

また地域住民等と一体となった観光振興という観点で、5ページでございますが、観光振興を図る上で、環境、景観、住民、産業、文化等地域の総合力を向上させる必要であると、地域住民や生産者等が地域の魅力を理解し、広域的な連携等により観光振興を図るべきであるとの意見がでてございます。

地域・生活環境の充実につきましては環境と調和した社会の形成ということで、環境保全と連携した観光、地域づくりが重要であるとか、環境保全に配慮したインフラ整備が不可欠であるとの意見がでてございます。

安全・安心な社会の形成につきましては、地域・生活に密着した産業が重要であると、

豊かな生活を持続させるための地域づくりが求められているであるとの意見がでてございます。

東アジア等との関係の強化という観点では、本州、海外の需要に応えられる生産・輸送システムを構築する必要があると、また海外市場等で勝負できるビジネスプランを構築する必要があると、輸出を促進させる物流インフラが重要であるとの意見が出されてございます。

続きまして、第1回目の論点整理をふまえて、釧路・根室地域の現状と目指すべき将来像として、資料2にまとめさせていただいておりますので、ご説明させていただきます。

地域の現状といたしましては、前回の委員会でもご説明させていただいておりますので、ポイントを絞ってご説明させていただきますが、全国や道内他地域に比べまして、人口減少が急速に進むと予測され、このままでは経済規模の縮小に伴い、地域活力が失われていくことが懸念されていると。高齢化も全道を上回ると予測されており、各産業の担い手不足も懸念されると人口減少の進展というかたちでございます。

また質の高い食という観点では、釧路・根室地域の農業でありますとか、水産業等は豊かな自然環境を背景に、全国・全道に対する安心・安全で、質の高い食の供給等重要な役割を担っておりますけれども、一方で食の高付加価値化や、他産業との連携はまだ十分に行われておらず、地元消費、地元加工といった地域内循環が十分に図られていない状況であるということでございます。

豊かな自然につきましては、釧路・根室地域は、知床世界自然遺産や3つの国立公園、6つのラムサール条約登録湿地等世界に誇れる自然環境に恵まれておりますけれども、そういった環境を活かして、アジア地域を中心とした海外観光客は増加傾向にありまして、こうした自然環境は観光産業の振興につながると期待されるということでございます。

また自然ということでは、管内地震が多いということございまして、それに伴う津波の被害も懸念されると、近年では暴風雪被害により交通障害が発生する等、厳しい自然環境でもあるというような現状でございます。

地域の課題につきましては、先ほどの論点整理にもありましたけれども、人口減少がもたらす課題ということで、全国や道内他地域に比べて急速に進むと予測されているということで、各地域がこれまで通りに機能を維持していくことは困難であると、釧路、根室、中標津といった都市圏とその周辺の農漁村地域、あるいは札幌等との役割を明確化し、役割分担や広域連携等を効果的、効率的に行い、様々な機能を補完しうる地域構造が求められていると。

経済面では、地域需要の減少に加え、担い手不足も懸念されますということで、海外を含めた販路開拓や地域内循環の充実といった取り組みのほか、担い手等の他地域からの取り込みや各産業・流通等の効率化が求められております。

地域のポテンシャルと地域のグランドデザインの欠如でございますが、質の高い食でありますとか、自然環境にも非常に地域にポテンシャルを有しておるということでございますが、現状では地域の持つ強みでありますとか、弱みでありますとか、そういったものを地域住民が十分に理解していないこともあり、十分に理解した上で、戦略的なグランドデザインを描いていないということございまして、地域のポテンシャルを十分に活かし切れていないことです。ということをごままして地域のポテンシャルを十分に活かしてい

こうということで、具体的には、地域の強みであります安心・安全で質の高い食産業と、世界に誇れる豊かな自然環境や、地域産業等地域の特色を活かした観光産業等の振興を図っていく必要があるということです。そして、食産業観光産業の下支えとなり、地域住民にとって重要な生活・環境基盤が充実していることも必要であるであろうということでございます。また、自然環境への負荷に最大限配慮する必要があるということが課題ということになってございます。

4ページでございますが、そういう課題を解決する、目標とする将来像といたしましては、大きく特色あるポテンシャルを活かした魅力ある地域づくりという点と、7ページありますが、地域の役割の見直しという点でありますとか、将来像を現実にするための仕組みづくりというようなかたちで、提案をさせていただきたいと思っております。

特色あるポテンシャルを活かした魅力ある地域づくりでございますが、安全・安心で質の高い食産業の構築ということで、食産業の土台になります1次産業の持続的な発展が重要であり、担い手不足については、新たな担い手者の取り込みのほか、法人化等による経営の効率化を図りまして、持続可能な産業構造を目指すということでございます。

また安全・安心で質の高い食の生産は、自然環境と調和した産業振興を図るため、資源循環型の産業の確立を目指すということでございます。最終的には高付加価値化につなげる地域ブランドを育成するための安全・安心で質の高い食の生産に加え、加工、販売といった連携した食産業の構築を目指すということでございます。

5ページに具体的な方向として、若干噛み砕いて書かかせておりますけれども、これにつきましては、パワーポイントの方でご説明させていただきたいと思っております。

自然環境と共生し地域産業と連携した観光産業の振興でございますが、先ほども述べましたとおり、管内は大変恵まれた自然環境でありますとか、景観、生産物ですとか、観光産業に活かす余地は非常に大きいということで、観光産業は有望な産業であるということはいままでもないのですが、観光振興をはかるといことは、交流人口が増加することで、地域の経済的基盤の底上げや、人口減少による影響をある程度カバーすること等も期待されているということでございます。

観光客の収容能力とか、海外観光客や個人観光客等の観光ニーズ・旅行形態の多様化をふまえ、それぞれの地域が集団観光と個人観光のどちらに重点的に取り組むかを決めていただくとか、広域連携することにより、観光産業の振興を図るということを目指していきたいということです。

ここでしか味わえないもの、ここでしか体験できない、体験の提供と、海外観光客に対する地元人材も活かした通訳等各種観光サービスの提供等による地域のもてなし・総合力により交流人口の増加を図っていきたいというふうに考えております。

恵まれた環境を観光資源として活用していく上では、環境保全に最大限配慮いたしまして、自然環境と観光産業の共生を図るということでございます。様々エコツアー等の個人観光を振興するための多様な情報媒体を通じた観光情報の提供を推進していきたいというふうに考えております。

先ほどご説明ちょっと忘れてしまいましたが、論点と書いてあるところにつきましては、あくまで委員会のための参考までに書かせていただいたもので、後でご説明しますけれども、将来像等広く一般の方々から意見を求めることを考えておるのですけれども、その時はその部分につきましては削除したいというふうに考えております。

地域の役割の見直しといういこと、住みたくなる地域、生活環境の充実を図っていくということ、人口減少化におきましては地域の全ての機能を維持、確保するためには非常に困難であるということ、その視点にたった上で、持続可能な社会・地域の基礎・基盤となる人的資源と、それを支えます専門的なサービスを提供しうる人材・機能を維持、確保するため、雇用の場を確保するとともに、豊かな自然環境を享受でき安心して暮らせる住環境と必要な利便性を確保するという必要があるということでございます。

同時に地震・津波、豪雨・豪雪等に対する防災、減災機能の向上を図る他、地域医療や福祉、教育等のサービスを維持するための交通アクセス機能の定時性、高速性を確保していきたいと考えています。

北方領土との交流人口の増加等国際交流の増加を図るといことも目指していきたいと考えております。

東アジアとの関係の強化で、8ページでございますけれども、管内農業、水産業につきましては、道外市場でありますとか、特に東アジア向けの輸出が活発となっているということもございまして、人口減少下においては、関東圏等道外のマーケットの拡大には自ずと限界が来るだろうといことございまして、安心・安全で質の高い食の輸出振興は、東アジアとも増加基調にあるということもありまして今後期待されるだろうということでございます。

ただ一方で釧路港等につきましては、輸出入につきましては、他の主要港に比べ荷役等の物流機能の面で十分でないとの指摘もございまして、道外・海外市場の需要に応えられる物流機能を充実させることによりまして、他地域との競争力を付け、東アジア等との関係の強化を図っていききたいとこういふうに考えております。また、そのためには物流機能、ハードの充実だけでなく、人的交流等のソフト面の充実も必要だろうと考えております。

9ページでございますけれども、先ほども出ましたけれども、都市圏と周辺地域との連携でありますとか、札幌圏等他地域との連携でありますとか、機能や役割分担を明確にする等して、この地域全体としての効率性・利便性の向上を念頭に置いた集中と選択といった視点から地域構造を見直す必要があるだろうと。

また、将来像を実現するための基礎・基盤となる情報化の推進や、人材育成・確保、自然環境や景観保全等と共存する社会資本整備の確保を図っていききたいということです。

先進的な取り組みや、地域の持つ強みを連携した新たな産業・ビジネスの創造を推進するとともに、ユビキタス等情報基盤の充実を目指していきたいと考えています。

これらのものを実効性のあるものにするため、ハード的施策とソフト的施策を効果的に連携させ、行政、民間企業、地域住民等が協働した取り組みを推進していきたいといふうと考えております。以上でございます。

**小磯委員長** 引き続き、こういったご議論をしていただくための少し資料ということで、資料3を用意しておりまして、時間の関係もありまして、簡単にパワーポイントをみなから説明をしていただければと思います。

**事務局（未来総研）** 未来総研北嶋でございます。資料3につきましてスライドを使いながら説明させていただきます。

資料3の位置づけでございますが、こちらは今ご説明いただきました資料2のそれぞれの将来像であるとか具体的な方向について、ではどのような取り組みができるのか、これまでやってきたのか、その現状はどうかというようなことについて、整理をさせていただいた資料でございます。

資料全体につきましては、36 ページでございますが、本日時間の都合もありますので、特に重要と思える点について、ピックアップしてご説明をさせていただきます。

お手元の資料3の2ページ目になりますけれども、安全・安心で質の高い食産業の構築ということで、担い手不足に対応した取り組みとして、農業生産法人数の推移を記載させていただいております。

これらにつきましては一部推計値もありまして、こうだということはなかなか言い辛い部分もありますのでけれども、乳用牛につきましては37 経営体で約 14,000 頭で全体のおよそ1割程度を占めていると、経営効率といえますか1 経営体あたりの飼養頭数が368 頭で、管内平均43 頭に比べるとやはり非常に大型化が、効率化が図られているということです。

同様に肉用牛につきましては、30 経営体で約 31,000 頭で全体のおよそ6割、管内平均は1戸あたり40 頭に比べて1 経営体あたり1,000 頭を越える状況でございます。

次に6 ページに飛ばさせていただきます。ここでは資料2の豊かな自然環境を享受した安全・安心な食の生産についての取り組みでございますが、H A C C P についてでございます。

H A C C P については標津漁港で水揚げされるサケについて、そのサケの水揚量を記載させていただいておりますが、これ以外にも管内にはH A C C P の工場がありまして、その部分がデータとして抜けておるのですけれども、サケ水揚量をみますと、およそ 13,500 トンで地域のサケ水揚げの1割強を示しているということでございます。

ちなみに事例ということでございますけれども、地域H A C C P 推進委員会というもので、H A C C P の実践の他、ハサップ認証シールを貼付する取り組みも実施しているというように、先進的な事例としてご紹介できるかと思えます。

次に8 ページでございます。自然環境と調和した持続可能な産業構造の構築といたしまして、家畜ふん尿等の資源循環型施設についての取り組みについて書かせていただいております。これら施設の酪農の利用頭数をみると、合計で 2,670 頭ということで地域全体の1%弱と現時点ではそのような状況になっております。

次に11 ページでございます。輸出を含めた販路開拓拡大を支える物流機能の充実ということで、ほくれん丸の事例を紹介させていただいております。ほくれん丸の就航により、移出量が20万トン台で推移しているというような事例を紹介させていただきます。

次に12 ページでございます。こちらの方は、前回の資料として整理をさせていただいておりますが、観光資源の分布及び利活用状況ということで、他の地域に比べますと、資源あたりの入込客数が若干少ないのではないかという懸念があるということと、また資源間との連携についても、他の地域と比べて、少ないのではないかということもいえるのかなというふうに思います。

次に15 ページでございます。自然環境との調和や産業活動との連携した観光メニューの提供ということで、標津町エコ・ツーリズム交流推進協議会の事例を示させていただいております。

取り組みにつきましては、水産現場の加工体験、サーモンフィッシング体験、色々取り組みがありますが、グラフでも示している通り、日帰り体験を楽しまれている方が、今年は1万人の受け入れを予定している。修学旅行客も今年度予定ですが931人予定しているということで、決してニッチではなくて、非常にビジネスとしてみても、非常に右肩上がりで推移しているというようなことがいえようかと思います。

次に17ページでございます。国際化や個人観光に対応したサービス・情報の提供ということで、観光情報の提供場所等について道の駅の状況について整理をさせていただいております。道の駅は道内に92カ所ありますが、この地域には6カ所で、圏域ということでみた場合にも最も少なく、面積比で見ても他圏域に比べて少ないという状況にあります。

なお、右側に書いておりますマップでございますが、例えば摩周温泉の178/235というのは、178が平日の1日当たりの利用者数、235が休日の1日当たりの利用者数を示しております。このように若干ばらつきはありますけれども、主要観光移動ルート上にあつて、利用は、ある意味活発であると整理ができるかと思います。

また、施設内にある情報端末の利用状況をみると、休日の厚岸では施設利用者の3割弱が利用しておられますけれども、その他の利用状況みますと施設に立ち寄られた方の1割にも満たない、利用が満たないということです。まだまだ改善の余地があるのかなというふうに整理をさせていただいております。利用されている内訳は、天気、道路画像、道路情報が上位になっております。

次に22ページでございます。道路による移動の高速化ということで、右側には1993年と2003年の移動時間の推移を示させていただいております。札幌や旭川等との移動時間は、高速道等により20%以上の短縮化が図られている一方で、例えば根室や羅臼、近隣の帯広等とのさほど時間距離はあまり短縮化が進んでいないという現状があるかと思います。

次に24ページでございます。豊かな自然を享受できる地域づくりということで、釧路市が実施した調査まちの採点簿調査結果報告書に基づいて、釧路市民の方々がこれからも住み続けたいとした場合に、その理由、釧路市の自慢できるところをアンケート結果から抜粋して紹介しております。

グラフをみていただければお分りの通り、住み続けたいその理由としては、自然環境が38.7%で、住宅事情に次いで2番目であると。また、釧路市の自慢できるところでは、自然環境が68.0%で他の項目を抜きんでいるという状況から、やはりこちらは釧路市のデータではございますが、自然環境というものがこの地域の大きな魅力であることがいえる一方で、やはり将来的にもこうした魅力を損なうことなく活かし、このような調査で都度チェックしていくこと等も重要ではないかということで、整理をさせていただいております。

次に29ページは地域の医療体制でございます。この地域は管内の病院・医師が釧路市の集中するという現状がございます。救急搬送も釧路市の集中するという現状がございますけれども、やはりそういうようなことを考えていくと所要時間の短縮とか、定時性確保が医療体制を整備していく上でも重要になるというようなかたちで、整理をさせていただいております。

次に30ページ事故の減少でございます。この地域の交通事故致死率は2.42で、これは交通事故100件あたりの致死率でございますが、全国平均、全道平均を上回っている状況でございます。また、交通事故死者の事故類型割合をみると、正面衝突が28%と最も多く



なっています。こういう状況にも対応が求められるとともに、災害による通行止めも多発している地域であるというふうに整理をさせていただいております。

次に 32 ページ輸出拡大に向けた取り組みでございます。釧路港の第 4 埠頭の 14 メートル岸壁が供用にともなって、韓国・釜山港向けの外貿コンテナ定期航路が就航された事例を紹介させていただいております。

この就航に伴いまして、右下の棒グラフでございますが、輸出・輸入とも量が非常に拡大基調にあるというようなことがいえようかと思えます。

次に 34 ページでございます。将来像を支える仕組みづくりということで、観光等各種情報デバイスとしての携帯電話が活用も期待されますが、サービスエリアをみると、国道ベースでみますと、不通区間が約 131 キロとなっており、総延長の約 16%の区間で携帯電話が使えない。当然これはエリアとしてはだんだん小さくなっておりますけれども、現状としてやはり、16%の地域で使えないという現状がございます。

次に 35 ページ将来像を支える仕組みづくりということで、人材の育成で、浜中町就農者研修牧場の事例を紹介しております。取り組みにつきましては、お読みいただければと思いますが、現在町内に 7 組の牧場が研修生によって開設されておられまして、聞き取り調査でございますが、約 400 ヘクタールであるということで、3 %程度の耕地の面積を支えているというようなところでまできております。

甚だかいつまんだ説明ではございましたが私の方からは以上でございます。

**小磯委員長** はい、ありがとうございます。只今最初に釧路開発建設部の参鍋次長の方から、前回の意見の論点整理をふまえた今後の目指すべき将来像ということで、資料 2 に基づいて、いくつかの論点も含めたたたき台をいただきました。

参鍋次長の説明にもありましたように、論点はあくまで今日皆さま方にご議論いただくための一つの情報提供ということで、様々な違う切り口があるのではないかと思います。スキームの立て方も含めて、遠慮なくご意見いただければと思います。

それを考えていただく材料ということで、パワーポイントの方で、いくつか現状の動き、それぞれのやはり、展開方向をやっていく中でも、既に芽があるもの、かなり手応えを感じながら、進められて地域のやはりそういうものを見据えながらその方向性というのは、やはり議論していくべきだということでもありますので、そういう現状の動きなんかもふまえながら、少しご議論いただければというふうに思います。

最初に今いただいた資料の中身に質問でここはちょっと良く分からないという、ご意見いただく前に質問事項がありましたら、お聞きしたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。もしご質問ありましたらご意見の中でも、あわせて関連してご発言いただいても結構かと思えます。それでは資料の特に 2、今後この地域どういう将来を目指していくべきか、その辺りどういう方策、どういう方向で、それを具体化に向けて取り組んでいけばいいかということで、少したたき台の考え方を示していただいたものについて、これについて少し皆さま方のご意見をいただければと思っております。

さて、最初に今回初めて田村委員ご参加をいただきまして、田村先生はご承知の通り北海道のみならず、日本の中でも地域計画の面では最高の専門家、スペシャリストということでありまして、私自身も一緒に、今国のレベルでの新しい北海道総合開発計画、このあ

り方みたいなところを審議会の、基本対策部会というところで議論しております。それも一緒に。今北海道庁の方でも新しく計画の策定が始まりましたが、そこでも一緒に参画させていただいてということで、色々な意味で地域計画の場でご一緒させていただいているのですけれども、第1回ということもあって、基本的な少し田村先生のお考えなんかも含めて、今後のこの地域の目指すべき将来像についてのコメントも含めて、ご意見いただければと思います。よろしくお願ひいたします。

**田村委員** 第1回目欠席いたしました田村です。どうぞよろしくお願ひいたします。多分こういう話になるのではないかとということで、飛行機の中で考えてきたのですけれども、4つあります。

1つ目が将来像をつくるつくり方ということなのですが、現状の延長線上に将来があるとしてつくるか、将来は新しくつくるもので現状の延長線上にないとしてつくるか、これが多分ポイントだと思うのです。

将来、人口は落ちてくるということですが、人間の脳みそといいいますか、人間の慣性としては右肩上がりになったままにあります。私は現状の延長線上に将来をつくる必要はないだろうという意見で、何を持って新しい価値観とか住まい方をつくっていくのだというところの議論を、発信したら面白いなという気がいたしました。

2つ目のキーワードは多様性ということなのですが、私がこの地域をみている時には、羅臼からずっとくる海。羅臼 阿寒の山。その間に酪農。これでは独立国はつくれないと思うのです。

やはり釧路を中心とした製造業とか、情報拠点とか、金融とか、エンジンをつけてやらないと、山と海と酪農じゃ飯食えないと思うのです。

そのところの釧路の役割というのをどういうふうにして捉えるのかということで、ある意味では多様性が一つのヒントではないかと。

それから北海道全体をみると、根釧ということで一つの圏域になっていますけれども、6圏域の中の一つです。6つの中での当該地域の特異性はどうなっているのか。小磯先生がよく主張されている道東と道西といいいますか、日高山脈を境に、経済圏が全然違うという視点ではどう考えるのか。

この道東全体におけるこの根釧地域の位置づけというものをどういうふう理解していくか。多様性について、北海道全体の6圏域の中のどういう多様性を持つのかということと、根釧地域の中の多様性をどうやって引き出すか、この2つを言いました。

3つ目ですが、4ページ目から5つ将来像が書いてあるのですが、ちょっと否定的に申し上げると、北海道中でつくれそうなタイトルになっている。

根釧地域の安全・安心で質の高い食産業の構築、見出しは北海道全部の見出しではないかと、ちょっと工夫した方がいいのかなという気がしました。

その時のヒントとして私が考えているのは、海外。東京に頼らないで、市場価格を安くというような、東アジアとの連携ということは、実は市場メカニズム、技術革新型、日本人の好きな得意なジャンルです。その部分の技術革新で、一つ新しい産業を起こす。もう一つ、新しい価値観を産業にすること。例えば高齢者ビジネスやゆとりビジネス。当然栗林さんも、近藤さんも考えていると思うのですけれども、そういう新しい時代が来た時にできるゆとり社会とか、成熟社会、これを先取りしてやろうという、新しい価値観からく

る市場づくり、それを先導できるという、2つあると思うのです。

この2つの部分をうまく織り交ぜてやると、北海道の中でも珍しいといわれるし、オールジャパンでも、やはり釧路だと言われるような気がしています。

産業というか将来像5つのところに、自然をみせてちゃんとビジネスしていますよと、したたかさをみせてみたいなという気がしました。

最後ですけれども、間違っているかもしれませんが大学とか、研究所とか、あるいは農協、漁協の金融が、どういうふうはこの地域に入っていったらいいかというのが、私は分からないで、ちょっと悩んでいるのです。

将来像の一番最後に出てくる実現に向けてというところで、将来像を支える仕組みづくりというところが、今の書きぶりは開発局型というかハードをつくりましょうなんです。これでは誰でも書ける。そうではなくて若い人方の価値観で、大学、研究機関、金融をうまくネットワークさせる。

**小磯委員長** ありがとうございます。田村先生らしい大変新鮮な切り口、しかも外の目からみて、以外に地元気につかないというか、非常にこう耳の痛いということで、本当はそうあるべきであるけれども、なかなか大変なので、ちょっと避けているというのを感じながら聞きました。

少し基本的なご指摘いただいた中で皆さま方のご意見聞いていく中で、あらためてまた気をつくことあれば、あとでご発言いただければと思います。よろしく願いいたします。

さて、これ以降は少しご自由に皆さま方から、ご発言をいただければなというふうに思いますが、いかがでしょうか。どなたからでもご自由に。石橋さんいかがでしょうか。すこし農業問題含めてこう。

**石橋委員** 今田村先生からちょっとショッキングな話もあったのですけれども、金融も含めてという話なのですが、まずその地域を元気にするための種をどうつくるかなんです。その種をお互いにその業界の中に内向きに考えるのではなくて、いみじくも今農業金融は、農協だけではなくて、もう既に大地みらいもやっています。それを既に使っている酪農家がでてきているわけです。

それから今、消費者金融が問題になっているわけですが、これもなかなかこの地域の中での消費者金融というのが入ってきていませんけれども、これは地域の農協、漁協も含めた人達が、そういうことをきちんとやれるようなシステムづくりをどうするか、そうやって地域に元気をつけていく、これからの課題だと思うのです。

これはやらなければならない問題だと思うのです。農協は今までその辺は臆病でしたから、そのへんはやはり取り組んでいかなければならないと。それから先生おっしゃられましたけれども、自然だけが売りかという、私もそうだと思っているのです。

むしろこれからはこの地域は自然も大事にしながらきちんと維持しながら、この地域の独特の文化をつくる、そういう視点が私は必要だと思う。それが観光にも結びついていくでしょうし、それからその文化に値する、付加価値を付けた地域の製品をつくっていくというの、これからの生き方だと思うのです。

私が一番気になっているのは日本の休日のあり方で、カレンダーをみるといわゆるその

国民の祝日がいっぱいあります。その祝日にどっと来ていなくなってしまうのです。私は日本の観光のあり方というのはそうではなくて、あの祝日は全廃してしまっていて、これはなかなか法律をつくるのは難しいかもしれませんが、これは確実にサラリーマンは、今ある年間の休日は自由に選択して取れるようなシステムをつくると、そうやって休日集中型ではなくて、一年間通して自由に休日をとることができるような、休日のつくり方、これが本当は私は大事なのではないかなと思うわけです。ゆっくり休日を楽しむことができるようなあり方をつくっていくというのが、私は大事な問題ではないかなと思っています。

**小磯委員長** なかなか大胆なご提案いただきました。さていかがでしょうか。遠慮なくどうぞ。特段、前回は一巡、最初の場合ということもあったのですが、ご意見いただけますか。気が付くところいただければと思います。辻中さんいかがでしょうか。論点の中では随分、辻中さんの観光面でのお考えを整理されて、今回この論点として組み立てられたという流れがあるのですが。

**辻中委員** 今の文化という話でましたけれども、私は実は変な話なのですけれども、道路づくりなんかも、つくったときが一番良くて、その後だんだん補修、補修でつぎはぎになっていく、ああいうようなことで、時間経つごとに、その価値が高まっていくような道路づくりができないのかなと、そういうようなことをちらっと思っていました。

道路というのは経済の大きな動脈でありますけれども、それと同時に地域にすると、文化の道だというようなこともあると思うのです。

そういう点では、道路なんかいっても、どこ行っても同じガードレールで、それから防雪柵があったりとかというような、前回もちょっとお話ししたのですが、道路の防雪柵なんかは20年後には、全部防雪林帯にこの地域は全部変えたらどうかとか、そういうことができないのかなと。

最初に申し上げましたように、一年一年年経るごとに、道路の表情が出てきたりというようなことになるのではないかなというようなことを、ちょっと具体的にはどのような案があるのかはありませんけれども、そういうようなことをちらっと考えながら、そうすると観光の方もこの地域の大きな特色がグランドとしてできるのではないかなというようなことを思いました。

**小磯委員長** ありがとうございます。大変大事な問題提起だと思います。文化という地域におけるこれからの取り組みの大事な視点を提起された中で、時間の経過の中で価値の出る社会資本整備、これからの社会資本整備のあり方の中で、私ちょっとご紹介したい話がありまして、3年前位前に近藤さん達と一緒に、台湾の方に地域の研究会ということで訪問したことがあるのですが、台湾で新幹線整備がされていまして、日本の技術協力でもあるのですが、実は技術協力した国によって、全部デザインが違っていると、その中でたまたま高雄ですけれども、みせていただいたところは、フランス系のデザインで本当におしゃれな、社会資本整備って、そんなに画一的にやるものでなくても実はいいのだなというのを、逆に勉強させられた経験があります。

やる気になれば、社会資本整備のあり方、色々なやり方が実はあるのではないかなと、これからの議論、やる気になれば色々なやり方あるのではないかなということで、道路の

お話ありましたけれども、実はこれからの時代こういう議論、議論提起なんかも含めながら、この地域は少し率先してやれば面白いのではないかなと思ひまして、ちょっと感じたところを話させていただきました。すみません大島先生、お願いします。

**大島委員** 今おっしゃったところアイデアなのですけれども、高知で議論した時に問題というか、ポイントは、今おっしゃられたようなメリットといいますか、サービス、いい道路の周りに住んでいる人は、通る人は素晴らしいというそういう評価、便益評価です。満足度が、計量的な評価を道路整備の中の便益として評価するようなシステムがないので、同じような道路をつくっちゃうのです。

高知で議論したことあるのですけれども、この道路は特別に皆も喜ぶような、あるいは素晴らしく平らですねというような、色々な並木とかいうような、周りの人を含めた満足度といいますか、サービスといいますか、そういうものを計量的に評価、もっと投資の評価の中に入れて、そういうようなものの価値を、実際に工事する時に、積算するようなシステムをつくれれば地域特有のものができると、ヨーロッパにはたくさんそういうような例があると思うのですけれども、それは例として申し上げたい。

**小磯委員長** ありがとうございました。どうでしょうか資料2、これからのこの地域の目指すべき将来像という基本的な部分、ご意見ということで。近藤さんどうでしょうか。

**近藤委員** 資料1と資料2を今みていたのですけれども、資料1の論点整理が非常にうまくまとめられていて、久しぶりにいい資料をみせていただいたなと、これは開発さんだけではなくて、他の会議だけでもそうですけれども、久しぶりに読み応えのある素晴らしい資料ができているなというふうに読ませていただきました。

それを基にして資料2ができあがっていると思いますので、資料2のポイントの整理も、非常にいいポイントで簡潔にまとめられていて、これは素晴らしい論点が整理されているなというふうに思っております。

そんな中で、ちょっと一つだけ気になったことがあるのですけれども、ここに書いてあることは勿論、地域としてやっていかなければならないことなのですが、ただこれを僕達住民が読んだ時に、これから先10年後、20年後この地域がとてもわくわくするような地域で、夢があって、未来があって、非常に素晴らしい地域だよとみえるかどうか、なかなかここからは、ここからは読み取れないのかなと思うのですよね。

やはり我々これから先、仕事をしていったり、生き続けなくてはいけない訳で、この地域に継続的に住みたいと思えるような地域になることが、やはり地域住民にとって一番重要なことで、そういう面では夢に近いような部分でもいいと思うので、ここは皆さんからも先ほどお話ありましたけれども、他の地域とは全く違ったこういう特異性のある、非常に素晴らしい地域になるのだよと、そういう夢になるような部分をこの中に書き込んでいただくと、非常にさらに実現に向けて、皆さんのモチベーションもあがっていい地域になっていくのではないかなということ、少し読みながら感じておりました。雑駁な意見ですけれども。

**小磯委員長** ありがとうございました。さて宮田さんどうでしょうか。

**宮田委員** 今の近藤さんのところにちょっと近いところがありますけれども、やはりブランドデザインとかいうものを、目標、形にしていくこと、この役割になっているのだからということをおもうのですけれども。

例えばやはりこの地域の中で、食、安全、どこでもこれは言っていますけれども、エゾシカだとか、クジラ肉だとか、それから今までやってこなかったのですが、ちょうど2年前の日経ビジネスで、廃れゆくまち釧路というのと、伸びゆくまち常呂というのが出ておまして、何でもかといえますと、200カイリの問題が起こったときに、なんだかんだいっても漁業補償とかもあってやってこられたから、この地域は何もしなかったと。

だけれども常呂は200カイリの時に、養殖を考えて、ホタテの養殖で今やそういったものを根付かせていると、やはり大事なものは、ここから地域にある題材で、やはりできることをやるということだと思ふのです。

これは漁業だけではなくて、農業においてもそうだと思うのです。例えば似たような気候帯であるのかどうかわかりませんが、ノルウェーとか向こうの方に行きますと、大規模のサケだとか、回遊魚の養殖場を沖合につくっているとか、あるいはどこでもやっていないかもしれませんが、カニの、稚ガニの何というのですか、放流はしているのですけれども、あれがどういうふう生態としているかをつかんでいないと思ふのです。

カニの養殖場をつくと、徹底的に甲殻類の付加価値の高いものにチャレンジするだとか、あるいはこの地域コンブがたくさんとれているので、美味しいウニ、カニが生息するわけですが、徹底的にそれを丘の上でできないのかということ、農業においても同じようなテーマで、高付加価値の農業にチャレンジできないのかと、例えばこの間浦臼の神内ファームで、プロミスの、金融業の会長が私財100億を投入してつくった実験牧場です。あそこには農業企業化財団、研究所というのがあって、財団法人になっているのかな、そこをみてきたのですけれども、未来の農場のようなものがありました。ああいうものを地域で、核となるようなものを中心として、地域で他の地域にない高品質で、安全なものを徹底的につくっていくと、それを今度は釧路でもどこでもいいのですが、やはり高レベルのHACCPだけではなくて、人手をかけないで、やはり釧路に誇れる会社だと思ふのですけれども、ニッコーという会社がありますが、近藤さんもニッコーの機械を使っていると思いますが、地元にある企業を使って、あそこは3次元のスキャナーつかってあたまを切ったりとかしっぽをとったりしますが、本州では水産加工場でもフルシステムを全部つくっているわけですね。お菓子焼いたり、それを袋詰めしたり、一貫したシステムをロボットでしているわけです。

そういった地元にある優れた企業、力を使っていって、クラスターを戦略的につくっていくと、そういうようなプロセスが、絶対に必要なのだと、先ほどのお話にありましたけれども、地域の金融がやはりそういったものと、地域のシニアの、団塊の世代の人達で、ビジネス経験の豊かな人が出てくると思ふます。そういう人の力を借りて、ここの地域でマーケティングだとか、販路拡大だとか、あるいは商品の付加価値付けについて、一緒になってくれる人を移住させてくるとか、やはり高付加価値で、明確にやっていくと、それを戦略的に農業、漁業、観光を含め、つくっていくのだと。

例えば先ほどの道路の話、僕は本当にそうだと思うのですが、去年皆でカナダ、ビクトリアに見に行ってきたら、道路のガードレールに木を使っていると、例えばこの資料の中

にもありますが、カムイエンジニアリングの耐久性のある木で、腐らなくて強度のあるような木、つくっている会社がここにあるわけです。こういったものを地域内で、景観上も優れている、こういったものを使いながらやっていく。ガードレールは景観、シーニックバイウェイで、展望台に使われる柵等はこういうものを使うと、先ほどの防雪柵もそうだと思います。木で作り、こういうものを加工してつくる。地域内で作り、戦略的にその技術をどんどん伸ばしていくと、これがインフラ整備プラスビジネスをのせていく仕組みそれを支援していく金もそうなのですけれども、何で信金さんとか、信組さんとかが金融監督庁のいう自己資本比率4%を維持する必要があるのか。地域金融なのですから、どんどん金つけるべきなのですよ。そのハンズオンしていく仕組みも、やはりあわせてつくって、インフラプラスハンズオンしていく仕組みによって、地域内の新しい付加価値をつくる企業をどんどんつくると。

もう一つ僕が感じるのは、ここは業界の人がいないのでいいですけども、帯広のお菓子やさんがたくさん釧路の駅前とか、北大通りに何軒かあるわけです。何でこの釧路でできないのですかということなのです。

それが、釧路でお客さんが観光客が来て、釧路で何か買っていくお土産ありますかといった時に、駅前に柳月がありますよとか、六花亭が入っていますよと、何を薦めているのかと、これは2年なり、5年以内に、帯広の製菓業をキャッチアップすると、2年以内にその商品をつくって、3年でマーケティングして、あそこだっけ皆100億から200億企業になっています。経常利益をみると、かなりの経常利益だそうです。

そういったものをつくる可能性はある訳ですが、今までのプロセスの中で欠如している。僕はやはりそれもあわせて、ここで一貫した原材料による商品によって、付加価値を生んでいくというこのお菓子のプロセスは一つの成功事例にしていくとか、そういうことも含め、地域で議論して出していく必要があるというふうに感じました。

**小磯委員長** ありがとうございます。今の話非常に大事なことで、やはり一言で言うときっちり足元をみつめるということ、実はそれが今までできっちりできていたのかどうか、その検証も含めて、その中で、地域に高い水準の技術力をもった企業もあるという。

あるいは、地域の中でしっかりと循環的視点で取り組んでいる企業経営が、芽が出てきていると、具体事例として感謝しなければならないのですが、カムイエンジニアリングのカムイウッドの事例も出していただいて、これからの社会資本整備の整備は地元で、新しくパイオニアで新しく開発していった、そういうものをきっちり組み込んで社会資本整備していくという、そういう姿勢というのは、非常に大事だと思いますし、できればこの釧路、根室地域のこれからの率先事例として、組み込んでいただければ、私今カムイエンジニアリングという立場から言っているのではなくて、そういう思いで、私も企業経営し、その地方発のベンチャーということで、取り組んできた経緯がありますので、是非そういう方向は、これからのこの委員会における一つのまとめの流れとして、是非位置づけていただければと、私自身思います。どうもありがとうございました。

さて栗林さんどうでしょうか、お待たせしましたという感じなのですかけれども。

**栗林委員** どのレベルでお話をしているのか分からなくて、皆さんのお話を聞いていくなかで、話すべきところがこれ以上ないかなというところが本音なのですかけれども、皆さ

んの話の追従ですみません。

やはり僕もこの地域というのは、自然と共生して生きていくべきだなと思っておりまし、耳障りの良い言葉ではなくて、自然を魅せながらも、いやらしく人間が入っていくところをとことん見せていく、魅せたいところをどんどん見せていく。

陰では色々な技術を使って、本当の自然（Nature）を見せるのではなくて、自然らしさを見せる。何を言っているのか伝わっていないかもしれませんが、いやらしく自然と共生していったらどうだろうかと思っています。

この前宮田さんと一緒に複合観光研究会という会で韓国に行って参りました。韓国の地元向けの Casino を見てきたのです。Casino は今この地域でも導入したいという目標になっていますが、Casino はともかく、Casino で働く人のための専門の学校というのは、今日本のどこにも存在しておりません。サービス専門を教えてくれる学校、専門学校というのを特色として、日本で作ってはどうかということ。本当にまとまっておりますけれども、道東、同じ悩みを抱えている地域がある中で、やはり北海道の中でも道東でできないというものを見つけたいと思いますし、出来れば他にまねの出来ないことを、この地方でやりたいなということを思います。

では具体的になんだということは皆さんのほうがたくさん持ってらっしゃると思いますので、僕はこれで止めさせて頂きたいと思います。

**小磯委員長** ありがとうございます。また後で気がついたところお話いただければと思います。出村先生今日は途中参加ということで、今までの皆さま方のご意見なんかもお聞きになられた上で、感想でもあればお聞かせいただければと思います。

**出村委員** どうも遅れまして。今までの発言を聞いて、いちいちもっともで、特に付け加えることはないのですが、これが根釧地域の将来像ということで、私が入ってきました時に、どなたでしたかもっと夢を、どうせ将来像を描くのですから、できないこと、できること合わせていれるということではなくて、将来目標として、夢があるというそういうペーパーを読んでいても励みになるということをおっしゃいましたけれども、まさにその通りだと思います。

例えばこの北海道の根釧みますと、はっきり言って、北海道の地域開発なり、地域のあり方の夢を描くという時に、広すぎるのです。例えばこのOHPのレジュメの11ページみてもそうですけれども、非常に広い領域を含んでいると、広いということは、マイナスであるけれども、別な面からいえば非常にプラスの面も持っている、海がありそれから酪農地帯があり、それから何よりも国立公園という観光地があるという、まず地域資源が非常に豊富だということです。

地域資源が豊富で、観光資源も豊富なそういうものをどういったかたちで結びつけていくのか、従来のように地域振興に、工場誘致だとかということではできないことですから、現在あるものをどういったかたちで結びつけていくか、先ほどどなたがおっしゃいましたけれども、クラスター考え方ではないのですが、観光にしる農業にしる、漁業にしる皆関連性をもっているということです。

そういう関連性を関連づけて、地域の中でこうやっていくということになると、むしろ関連性を持たせてやっていくためには、小さい単位ということなのではないでしょうか、小さい単



位で考えるということ逆を言えればできるということなのです。

今まで何か大きな産業があれば、そういうものを結びつけて大きな何かをやろうということではなくて、漁業とそれから農業と、観光とを結びつけるとスポットと言いましょか、小さいところでそうものが集積できるという。

それともう一つ、府県では地域の振興だとか、特に農業、環境なんかを考える場合、流域ということで、何々町とかそういうことではなくて、一つの河川の流域の中で、川上、川下そういうところで、例えば農業なら農業、環境問題なら環境問題と、そういう流れで考えようというそういう考え方、最近我々の仲間でもしています。

私は北海道の中で流域というのは概念は何かなという時に、道路網だと思うのです。府県の道路網と違って、北海道の道路網というのはよく発達していますし、大きな道路網がありますから、同じ過疎地帯といっても、ちょっと車を走らせればすぐ大きな道路に取り付くと、ですから決してそれは距離では長いかわからないけれども、過疎というそういう状況ではないのかなというそういう気がいたします。

道路網みたいに、大きな動脈というところに、ここにある資源を結びつけて、大きな単位ではなく、むしろ小さな単位でやっていく可能性がある、大きいところはむしろそういういっぱい小さい点をつくることで、結びつけることである程度広いエリアというものをカバーできるのではないかと。

根釧にある地域資源考えますと、今いったように一次産業を中心とした産物と、そこから成り立つ観光ということでしょうか。観光ということ考えますと、その性質上、例えば経済学で言うと、ポジショングッズというのでしょうか、局地財といいますか、そこに来ないと観光、サービスを楽しむことができないと、ですからやはり人が来るといふことに、色々知恵を出すというのでしょうか。

北海道観光を考える場合、その意味でエアドゥの貢献は非常に大きいと思うのですけれども、そういう地域資源をどうにかたちで結びつけていくのかという、そういう面から今言ったようなことで、そこで色々な活動のそういうメニューが形成できるのではないかなという、これからの社会の情勢としては、リタイアした、ある面ではお金をもっている、自然だとか健康だとか、そういうものに対して強い憧れを持つ高齢者、中高齢者が多くなりますから、客観条件、この中にいる人々にやる気の条件、そういう条件はそれなりに私は得ることはできるのではないかなと、先ほど言ったように現状分析は勿論重要ですが、せっかく将来像の検討ですから、夢の中に入れた将来像を描ければ私は思いますが。

**小磯委員長** ありがとうございます。栗林さんお願いします。

**栗林委員** ごめんなさい。名前が将来像検討委員会ということで、どうしても堅くなったり、大きな話をしなきゃいけないのかなと思ってしまいますが、希望を言わせて頂ければ、もっと遊びを取り入れてほしい、遊び心を入れてほしいと思います。

先ほどの観光の話で、この資料の中にありましたが、色々な観光をする場所は有るのですけれども、その距離が非常に広すぎて、その場所を見るために丸一日必要であるとか、一日かけても二つしか見られない等、そういう側面もあります。

その合間、合間に何らかのかたちの、遊び心を入れることによって、もっとルートとし

での魅力を出して、遊んでもらうことできるのではないかなと思います。身近な考え方で、今すぐ出来ることじゃないかなと思います。

知床にいく途中のルートに知床旅情を奏でる「音の出る道路」があると聞いていますが、そういう遊び心はもっともっと色々なところで取り入れてほしいなと思います。今は無くなってしまうたらしいのですけれども松山千春さんの御出身の足寄町のように、松山千春さんを前面に出した大きな看板が在って、それを見に来る観光客が大勢居られた人がいたと。そういうことや、人がつくれる観光資源というの、そういうものを取り入れて人を楽しませるそういう観光も、この中に突っ込んで頂ければと思います。

**小磯委員長** ありがとうございます。はい、大島先生。

**大島委員** この会議時間が短くて、たくさんおられるので、チャンスは一度とと思って、まとめてポイントだけ申しますので、できるだけ5分以内にポイントだけ申します。

コンサルタントの方、非常にまとめ方とか、構成が上手なので、多分意図を解して色々ところ調べていただけるのではないかなと思いますので、ポイントだけ申します。

まず、このこういう議論は地域振興とか、産業振興とか、当然皆さん色々なことをおっしゃいます。ところが最後、社会基盤で、全国総合開発計画から始まって、何十兆円というそのお金を使ってきて、それで書いてあったことは産業振興であり、くにづくりとっておきながら、インフラの整備で何十兆円というお金を使って、今回のこの議論から私は感じるのですけれども、あまりにもギャップが大きすぎて、もう少しそこを繋ぐような議論をしないと、最後は建設部の事業執行予算をみても、河川であり、港湾であり、道路ということなので、皆さんここで夢を語る時は、産業振興で語りますよね。

そういう意味で今までの、何十兆円という産業振興というものを、狙ってきたそういうもの、総括はどうなっているか、そういう点は非常に感じています。これ前段です。

それでこれからは私の意見といたしますか、一つはかなり北見から釧路に来てはいますが、この地域の発展の特性から、釧路の人口の重心といたしますか、ずっとこの圏域の南に最南のところにありますから、耐震性といたしますか、地域の発展から考えると、非常に偏った条件にあるというふうに思っております。

それから地震が起きた時でも、周辺の盛土の道路のその崩れる被害、いつも一発起きると500億円の被害が起きています。東方沖の時も、釧路沖の時も500億円の被害がありました。それについては現状復旧ですから、必ずそのぐらいの地震が起きると、そのまた起きるということです。ですから、その点のポイント、少なくとも社会基盤整備の時には、もう少し広域的な整備をしないと、どうしても釧路地域に偏っているという感じがいたします。

これに関しまして2番目のポイントですが、私は結局地元にいるとまともなことを言わないとあれですけども、今日は他所から来ていますので、もう少し耳が痛いことをいわないとまともなことを言ってもしょうがないと思ひまして。

もう一つは駅の連続立交の話です。これは前々から小磯先生とか、田村先生も色々お考えされているし、長い間歴史があるし色々とお聞きしております。北見で連続立交ありますし、帯広の例もありますし、これは色々B/Cといたしますか、その事業評価で難しいところありますが、しかし連続立体交差といたしますか、土地がつながることによる長期的な

効果が。普通の事業評価、便益評価では計り知れない効果があって、長い地域の発展の中では非常に効果があると思います。

ですからもう少し、賛否両論色々あるのでしょうかけれども、私自身はもう一度考えてみる必要があるのではないかと、完全に連続立交でもなくても、効果でいいのかもしれないけれども、駅前の幣舞橋からくる幹線は、少なくともつき抜けられるような交通体系にしないと、最初のポイントの南と北の長期的なつながりから言ったら、大きな問題になるのではないかと、この話をする時、必ずJRとの事業との関係が出てきますけれども、そのところはもう少し、事業評価の中でできるだけ地元で工事ができるような、そういった取り組みが必要というのが細かい話ですけども、必要ということが2番目です。

それから3番目は、例えば北見はタマネギ生産日本一で、タマネギのための健康食品のための、様々な取り組み、大学中心でやっております。ですからこの地域は水産で、資源がある訳ですから、例えば水産資源一つとっても、トレーサビリティによる高付加価値化を高めるとか、もっと高付加価値化を高めるような取り組みというのは非常に多くあると思います。

その時にやはり足りないのは、高付加価値化を高めるための仕組み、組織といいですか、ですから例えば、魚の皮は医療に転用して非常に、医療のための材料になります。素材を高付加価値化を高め、特に医療に応用するとか、健康食品に応用するとか、そういった産業と連携するような、そういった取り組みで、大きな産業に育つ余地は十分にあると、素材がある訳ですから、そういったものを取り組みをする必要があるのではないかとということ。

一つは生産物の高付加価値化を高めるということで3番目の点で、4番目はもう少しその素材を転換して、医療等、薬品、薬とか、健康食品とかそういったものに転換するようなそういったものを、色々なものがございますので、特にバイオ関係ですとか、色々なものがございます。

最後に観光の点ですけども、リピーターの数を調べていないように思います。例えばアメリカのコロラドにアスペンというところがありまして、ものすごい観光で、山の中ですけども、観光のまちで、村ですね。

ものすごくイベントといいですか、大きな学会、国際会議とか誘致しています。ど田舎ですけども、周りにはホーストレッキングがあったり、ラフティングがあったりして、先ほどからおっしゃっているような、様々な観光で楽しませるかということで、観光が全部、観光の組合といいですか、マネージメントする組織がありまして、そこで全部コントロールして、そういうところと学会がリンクして、大きなイベントなりを誘致するようなことをやっております。

ですからそういうことをやらないと、本当田舎ですから、何も無い。ただスキーを滑りに来るだけですけども、そういう仕組みをつくるようにして、様々におっしゃった観光資源を、もっと高度なリピーターを増やす、高度に利用してリピーターを増やすといくらでもイメージができると思います。そういったところを取り組んでいただきたいとその点申し上げます。

**小磯委員長** ありがとうございます。少し幅広い論点でお話をいただきました。

どうでしょうか、ほぼ一巡した中で、一つご紹介したいご意見がございます。今日は行木

先生は今日ご欠席なのですが、事前にご意見をいただいております、それを事務局の方からご紹介をお願いします。

**事務局（未来総研）** それでは今日お手元に用意させていただきました資料の中に、行木委員参考意見というようなものを添付させていただいております。こちらの方に基づいて簡単にご紹介をさせていただきます。

行木委員本日ご欠席ということで、資料等をご説明しておりますが、その中でいただいた意見を事務局の方で簡単に整理をさせていただいております。

それでは資料に基づいてご説明いたしますが、基本的な考えとしては、北海道、広い、大きい、荒っぽい、いい加減、大雑把、包容力があり開放的、そして自然がたっぷりというイメージがあるけれども、このことはこの地域にも最も当てはまり、こういうイメージをもっと色々な方向で活かしていくべきであるということが考え方の一つ。

そういうような考え方からいきますと、食産業の部門としましては、クリーンな環境の産物のブランド化、あるいは山林の分収育有のような消費者と直結した一次産品の生産・管理。

観光と地域産業については、道の駅の利用現状の改善、観光資源等のランクづけ、体験型観光の促進、外国人を観光客として呼び込むだけではなくて、潜在型外国人の獲得を目指す方向も一つではないかということと、裏にいきますが、ロシアからみればこの地域は温暖な風土であると、こういうようなところを逆転の発想でピーアールすべきではないかというようなご意見をいただいております。

住みたくなる地域というような切り口で参りますと、災害については寒冷地、研究所を設置しまして、色々な研究開発を行っていくこと、標識については万国共通の記号を多用したり、外国語表示が必要であること、地域生活ガイドについては、こういった地域の状況とかガイドというか、冊子を様々なかたちで、まとめて発行していくべきではないだろうかということ。

最後に開放的な広域行政ということで、あらゆる地域からアクセスできる生活資源の共有、こういったようなことをネットワークといいますか、こういうようなこととともに、図書館、教育機関の充実も行っていくべきではないかと、こういったご意見を頂戴しております。以上です。

**小磯委員長** ありがとうございます。行木先生はお医者さまでいらっしゃるのですけれども、本当に地域の問題に対して幅広い関心と、それからなかなかの提案力をもっていらっしゃる、あらためて感心をいたしました。

あといかがでしょうか。石橋さんどうでしょうか、少し今回の将来像に向けて幅広いお立場から。

**石橋委員** 行木先生の最後の所にありますけれども、いわゆる町村合併が一つの区切りを迎えまして、新たな方向性に向かうのだと思いますが、私は町村合併という、合併でやるのがいいのか、緩やかな連携しながら地域行政をきちんとつくっていくというやり方がいいのか。

ある意味では、町村単位でやるのがいいのかばらばらにやるのではなくて、地域全体で、

例えば釧路、根室圏、ある意味では、さっき出村先生がおっしゃられた、川の流れのよう  
にという言い方がありますが、釧路、根室圏は本来、一つの地域特性を、ちょうど知床の  
連峰から、浦幌の大地に囲まれた一つの地域で、地域特性を一つのものとして考えた時の  
色々な行政のあり方、その内それぞれの町村が独自にやりながら連携して、この地域運  
営をするという、発想を私はもっていくべきではないかと思うのです。

それともう一つは、私は農業の分野で仕事をしているのですけれども、ある意味でこの  
地域の農協という組織は、地域づくり、農村の地域づくりに責任を持つ立場にあるわけ  
です。CSRと企業責任と最近言われていますけれども、これはある意味で言うと農協が農  
村社会をつくる地域責任を持っているわけです。

農協がその中で地域づくりのための、行政と一緒にあって積極的に関わりを持つという  
ことが、これからの地域づくりには一番大事なのではないかと思うのです。その中で、先  
ほど宮田さんから厳しいご発言があったのですが、ある意味でいうと、農協がもっている  
資金力、ある程度あります。それをどうやって活かして地域づくりのために使っていくか  
と、やはりやっていかなければならない。そういう時代になったと思います。

農協は農業者の生活と営農守るのは使命でありますけれども、同時に地域づくりの役割  
も負わされているというふうに考えて行動していかなければならないと、そんな時代に入  
ったなと思います。

**小磯委員長** ありがとうございます。最後にお話が出た農協のお話の中で、先ほどか  
ら地域の金融という問題がでておりまして、これからの地域の政策議論の中で、やはり地  
域の金融システムという、これはやはり一つの鍵だと思います。

今残念ながら、これは北海道でも道東でもそうですけれども、地元で集めた資金、それ  
が金融機関として本来地域に還元されているかということ、そうではない。半分近いお金が  
外に流れているということです。

これはやはり逆に言うと悲しい現実であって、それは色々な事情があります。地域にお  
ける再び投資するだけの基板、受け皿が地域の中にないと、でもそれを少しでも高めてい  
くという。

これは社会資本整備とか、地域のこれからの産業論を考えていく中で、欠かせない問題  
で、これはもう国だけの金融政策における任せる時代なのかと、そこもあらためて地域の  
場としての議論、テーマとしてきっちり持ち込んでいく。できれば循環型の地域経済構造、  
金融の分野も含めて議論していくとようなことが、私はあってもいいのじゃないかなと思  
います。

それからもう一点、石橋さんの方から前段の市町村の新たな合併の動きについてのお話  
があったので、私は今北海道の市町村合併、この推進審議会がありまして、審議会の会長  
をしておりまして、立場上ちょっと今の状況を話しておきますと、石橋さんが今おっしゃ  
られた問題意識と私は全く同じです。

ただ合併のための方法論をどうするかをいう、そういう視点の議論であってはいけない  
と、ただこれだけ厳しい地方財政環境の下で、合併という政策的テーマを与えられた中で、  
目を背ける訳には私はいかないと、そこで議論すべきということは何かといいますと、ど  
ういう地域づくりをその地域は目指していくのか、そのしっかりとした議論の中で、方法  
論として合併という選択肢が相応しいのか、あるいは広域連携のような、やわらかい連携

で、それが到達できるのか、達成できるのか。

そういうきちっとした議論を目を背けることなくしっかりやっていると、それぞれの地域の次の世代に対して、私は禍根を残すと、やはりこれだけ厳しい財政環境の下で、どういう政策が国からどんどんでてるのかわからない。それに対してきちり応えられるような状況にしておこうというのが私の考え方で、今の審議会議論の中で進めてきているということでお話していきたいと思います。

そこで実は先ほどの行木先生のペーパーにもありますように、これからの時代の基礎的自治体の担うべき行政サービスとして、どういう行政サービスが地域にとって大事かといえますと、医療、関連福祉等も含めたそういうサービスのあり方は必要ではないかなと、個人的には思っています。

したがって北海道の市町村合併の審議会の一つの長期の提案というかたちで、北海道の将来の姿ということで、北海道の市町村の姿ということで、北海道の市町村を21に区分するというそんな考え方も提案しました。

それで議論していきましょと、要は向き合ってしっかり、地域が将来どういう地域を目指していくのか、そのために市町村が担うべき行政サービスは何なのかという、その議論が一番大事なのではないかなということ、今合併に向けて議論が進んでいるということを紹介させていただきました。

さて実はこの委員会には、周りに座っておられますけれども、アドバイザーのメンバーがかなりおられます。オブザーバーではありませんで、アドバイザーであると、これは大変大事なことで、ただオブザーブしていればいいということではなくて、少しアドバイザーの方々からご意見なり感想をいただければなというふうに思っています。

かなりの方、私存じ上げている方なので、どうでしょうか。挙手をいただいて発言するよりも、少し今までの議論に関連するところ、ご意見いただければなと思うのですが、今日標津町から川口さん来ておられますけれども、さっき色々な事例の紹介の中でも、地域H A C C Pとか、その他標津ではエコツーリズムの観光、そういう地域資源を活かした取り組みをやっておられるということで、実は私の地域経済研究センターでもこの取り組みを、地域における経済効果ってどうなのだろうかということで、一緒に勉強させていただいたというそういう地域でもあります。

やはりこの地域将来、食産業とか、観光産業とか、これからのところが大きな柱だという今議論が今ある中で、食の安全の面、地域資源を活かした観光ということは今まで取り組んでこられた立場で、感想も含めてどんな今考え方もっておられるのか折角ですでお聞かせ願えればと思いますけれども、よろしく願いいたします。

**標津町アドバイザー** 折角ですから、それでは地域H A C C Pなり、エコツーリズムと先ほど紹介されましたけれども、あくまでも地域で生きていくために産業をどうやっていくかということから派生したことでありまして、この我々のサケ、ホタテを中心にどうやって消費者と向きあっていくかということに行きつく先が、この安全・安心の具体的な実践ということになりました。

これを消費者にどうやってみせるかということから、エコツーリズムということになりまして、産業を観光化するということが結果的に、観光が産業化になってきたということにつながっております。

非常に小さなまちでございまして、我々が独占という小さいまちでどうやって生きていくかということになりますと、生産のまちということで、原料をきちっと安定的に消費者にどうやってみせていくかということに、行きつく先がこういうことになった訳ですけれども、そういうことをやりながら、自分のまち、楽しく安心して暮らせるまちにということとで考えている訳ですが、今日議論を聞いていて、やはり合併問題もそうですけれども、行きつく先が、本当に楽しいまちになるのかということも、合併問題と色々な論議になりまして、なかなか躊躇した部分であるかと思えます。

本当に地域づくり難しいですけれども、願わくは夢、わくわくするような、先ほど委員さんおっしゃられましたけれども、楽しい地域にしていかなければならないというのが我々の目標でありますし、何より都会と田舎一体で、我々ががんばっているから、都会があり、都会がまた田舎に対して健康、癒し、食料というものを供給しあえるという一体の関係を築いていくようにしたいと考えております。

いずれにしても本当に楽しく、わくわくそういうようなまちづくりをしていきたいと思っておりますし、今日の意見参考にしながら、また肝に命じていきたいと思っております。

**小磯委員長** 川口さんどうでしょうか。地域H A C C Pという、これは地元の資源に対して安全・安心という食に対する付加価値を、自分達の地域で、自力でなおかつ自分たちのできる範囲で取り組んでいこうという、今までやってこられた手応えをちょっとお聞かせいただきたいのですが。

**標津町アドバイザー** まずこれは地域の産業を守るということとして、まずは消費者と向き合う中で、万一事故があれば地域の産業がつぶれますので、それから始まったことなのですが、それがだんだん地域H A C C P、消費者を向き合いながらきたおかげで、東京都のトレーサビリティ認定、サケ、ホタテ、イクラで我々の製品がとれまして、今東京都のトレーサビリティ認定を受けて、シールを貼れるのはうちだけです。

このように差別化、また我々産地の責任ということも考えておりますので、この辺がやっている人間大変なのですけれども、例えばこれがエコツーリズムと連動しておりますので、本年2月に農水省のオーライニッポン大賞、エコツーリズムが受けました。

そうすると漁業者の方も、自分たちのやった成果が、こんなかたちで現れるのだなというふうにして励みになりまして、一歩一歩次の段階の上がっていけるのかなと、節目節目で励みをいただくというところも、我々についてはいるなと思うのですけれども、小磯先生にも色々支援していただきまして、色々励みをいただいているというところです。

**小磯委員長** 標津で私がした経験、貴重な経験として、今の地域H A C C P、エコツーリズムと、要は忠類川を少し調査という名目で、サーモンが釣れるという試験的にやられて、そこは本当に地域にとって、この経済効果のある産業としてつながっている、そこを見極めて欲しいという、そういう相談を受けまして、調査したことがありました。

私大変驚いたことがありまして、標津のまちの場合は他の道東地域に比べれば、わかりやすく言えば、そんなに大した観光資源がない中で、観光というものを本当に自分達の地域の中で作りだしていけるのか、今やっていることが本当に効果のあるものなのだろうかという、象徴的な事例だったと思うのです。

ところが私は調べてみて驚いたのですが、忠類川に毎年フィッシングに来られる方、この方達の経済効果というのは、非常に大きいものがあったと、しかもかなりの方がリピーターであるという、滞在日数も長いという。具体的な経済効果の数字もお示しして、その後皆さん方ががんばってもらって、そういう一つの契機になったのではないかなと思いますけれども、要はそんなに恵まれた観光資源がなくても、やる気と自分たちのがんばりがあり、その地域H A C C Pという地域のイメージアップ、付加価値を高めていくことと合わせることによって、新しいまちづくりが実はできるのだということ、我々はこの地域の足元にもそういう取り組みがあるということで、そういう事例があるということで今日は委員の皆さん方にもお話を聞いていただきました。そんな思いで今質問させていただきました。はい、出村先生どうぞ。

**出村委員** 今の話に関連してちょっと意見言いたいと思うのですが、最近グリーンツーリズム、エコツーリズムというのがでてきて、環境省でしょうか、6つか7つの代表的なモデル地域で自然資源を利用したエコツーリズムということで、知床、白神山地、小笠原諸島でしょうか。

エコツーリズム、グリーンツーリズムだとか、そういう従来の観光とは違うようなかたちでのツーリズムがあります。だから観光といってしまうと従来の物見遊山的なものになってしまうので、そういうことを研究している先生は、意識的に観光という言葉を使わずに、ツーリズムというのですけれども、例えばエコツーリズムだけではなくて、北大も今年、来年に向けて、大学院レベルの観光学科、観光大学院をつくらうというのですけれども、その時にやはり医学関係からも自分達も入れて欲しいという。

つまりヘルスツーリズムだとか、ツーリズムと他の活動を結びつけて色々やると。例えばアニマルウェルフェア、そういうものとツーリズムを結びつけると、地域の色々な活動だとか、産業、従来はただものをつくるだとか、経済行為でそういうものを振興していくというそういう動きがありますけれども、やはりツーリズムという交流というかたちで、やっていくという動きを、それぞれの地域でいわゆる上に何かを付けて、何とかツーリズムというかたちでもいいですから、そういう活動は私は色々な地域で、できるのではないかなとそういうものはむしろ、この根釧地域ではツーリズムの一種の見本市のようにツーリズムがあると。そういう取り組みも必要なのではないのかなという感想を持ちました。

**小磯委員長** ありがとうございました。田村先生どうですか。前回の欠席を含めて2回位発言をいただければと。

**田村委員** こわい地域に来たなと考えていたのです。稚内で2年位まちづくりをしていますが、稚内の人と言うのです。我々は札幌なんかは向いていない。札幌に向いていても何もしてくれない。すごいと言ったら、釧路はもっとすごいよと言われました。予感していますけれども、札幌向いていませんよね。根室もそうですけれども。それ位遠いのですよ、札幌から。

札幌からすごく遠いということはハッピーニュースで、室蘭からみると羨ましい。だから地域の人々の住まい方の抽出は、そここのところの文化を認めて、うまく煽っていけばいいのかなというのが1つ目。



どなたか言っておられた、これから住む人、外から連れてくる人、これをうまくマーケティングの中に入れてあげる、仲間に入れてあげると、いいのではないかなという気がします。

僕はアイルランドしか知らないのですけれども、スコットランド知っている方、色々いらっしゃいますけれども、ここは海外ですよ。間違いなく。

子ども達にこんな海外をつくるぞと宣言するのはどうか。東南アジアの人方も見に来ますから。

**小磯委員長** ありがとうございます。論客ぞろいということで色々な今日ご意見いただきました。

整理はできないのですけれども、やはりこの地域らしさ、特性、特質みたいなものを、少しきっちり、際立たせた中で、そこに夢を持ちながら、楽しみを持ちながら、その将来像づくりを進めていったらどうだろうというところ、その中で地元のいい取り組みがきっちり素晴らしくあると思います。

それはどうつなげていくかという、その辺に具体策につながっていく、大きなヒントがあるのではないかなと、あらためて地域のもっている取り組みなり、夢なりをうまく展開していくような将来像づくりに向けていただくというのが、皆さん方のお気持ちではないかなというふうに私なりに聞かせていただきました。

特に私はこの地域の特徴は異質性だと思います。私今まで日本列島4つの島全部で生活してきましたけれども、ここはやはり何かというパスポートのいらぬ日本語の通じる外国だということで、そういう感じで、そういうものはしっかりメッセージを出すことによって、ものすごいまだまだ発展性は私はあるのではないかなというふうに思います。

最後に一点、お願いがありまして、今後の将来像に向けてのシナリオづくり、スキームづくりという中で、第1回の議論、情報提供の中で、私自身も少しお手伝いをさせていただきまして、この地域の経済構造、産業構造というものの、特徴、特性、それをふまえたシナリオづくりというものが、やはりきっちりあるべきではないかなという中で、この地域の経済構造の中で、外で儲けてくるという、したたかな稼ぐ力はある地域だと、しかし残念ながら稼いできたものを地元でなかなか消費しないし、なおかつなかなか地元のものも使わないという、そこでかなりのところを、外にもれさせていると、実は両面、外で稼いできたものはどんどん伸ばし、なおかつ地域の中で使っていくながら、地域の体質を強化していく。

要は域外市場、域内市場、そのバランスの取れた、産業活性化方策の中で、この釧路、根室の新しい力のある経済力を、益々強くしていくのだというところに、食産業とか、観光産業とか、そういうものを位置づけながら、スキームづくりをして欲しいなと。

例えば観光産業というのは、ある意味で外から金を稼いでくるのには素晴らしい産業なのです。外から財布にたくさんお金をもって来て、いい装置があれば、魅力のある消費機会があれば、どんどんこの地域に消費してくれる。

多分地域の自立というのは、収支のバランスです。ところがこれからは公共投資で収支のバランスを賄う、農業用補助金で賄うということが段々難しくなってくる。そうなってくると、製造業で稼げるかという、一挙手一動でなかなかそんなに製造業では稼げないと、そういう時の観光業のいい移出産業としての地域の役割という高いと思います。

しかも、地元の資源を使ってその産業が成り立たせることができると、その中で自然環境資源、そういうものもどういうふうにも有効に活用しながら、食産業との連携、そういうものでやはり素晴らしい地域の産業ビジョンがあって、この地域では展開できるように思います。

そういうものをさらに変えていくことでのインフラ整備がどうあるべきかというところで、一つの将来像というものを今後検討していただければと、私はいいのではないかとこのように思っております。

ちょっと議論の予定時間をちょっと5分ほどオーバーしてしまいましたが、事務局の方から少し説明事項がありますので、パブリック・インボルブメントのその辺の取り組みのところ、事務局から説明していただけると、これは田中さんですか、お願いします。

**事務局（釧路開建）** それではお配りしております資料4のP Iに關しましてご説明いたします。今回のP Iの目的ですが、本委員会で議論した釧路地域の現状及び課題、目指すべき将来像等について、地域住民の皆様へ情報提供及び意見収集を行い、今後の地域計画に対する住民ニーズ、意向等の把握を目的として行います。

今回のP Iの方法としまして、本委員会の目的、議論経緯、論点を、釧路開発建設部のホームページ及び新聞等で示しまして、これらに対する意見等をメール・葉書等で求めます。他の行政機関のホームページとのリンクについても検討する予定です。

また、各市町村や関係機関等から同様に意見を聴取するとともに、アンケート用紙を添付した委員会の概要資料を、各市町村へ配布・展示・回収し、地域住民の皆様の意向を把握するという事を予定しております。

情報の提供内容といたしましては、1から3に書いてあります本委員会の目的及び第1回、第2回の議論の概要及び論点整理、釧路・根室地域の現状と目指すべき将来像、地域の現状及び社会資本のサービス等の状況につきましての情報提供を行います。

アンケート調査につきましては、地域の現状、課題等について、意見を収集する。地域づくりの目標、具体的な方策、その際の論点についての意見を収集する。本委員会全般に対する意見のほか、上記の項目にとらわれずにここが課題だ、こうあるべき、こうすべきといった項目について、意見収集を行うことを予定しております。

このP Iに關しまして、特段先生からご意見がなければ、事務局と委員長の方で調整しまして具体化して、次回の委員会までに実施したいと思っておりますが、特にご意見等ございますでしょうか。

**小磯委員長** 委員の皆さんどうでしょうか。今ご説明があったこういうやり方で進められるということで、基本的にはよろしいでしょうか。

あとは前段の方のやり方というのは、基本的に双方向ですから、相手もそういう問題意識をきっちりもたなければいけないと、なかなかこういう意見はできませんので、その辺は柔軟に、機能的に進めていただくと、ただ、ホームページに出したからどんどん来いという訳ではなくて、機会あるごとに、こういうことやっているのだけれども、どうでしょうか、というようなかたちで少し地域の中に入っていかれる姿勢が大事ではないかなと私は思います。では、細かいところは事務局と私の方で進めさせていただきます。

さてあとはいかがでしょうか、事務局の方で、よろしいでしょうか。それでは事務連絡

とかありましたら、お願いします。

**事務局（釧路開建）** それでは、最後に事務連絡といたしまして、スケジュール、資料5にございますが、スケジュールにつきましてご説明いたします。

議事録及び議論のポイントを早急に整理しますとともに、釧路・根室地域の現状と釧路・根室地域が目指す将来像を一旦事務局にて修正いたしまして、再度委員の皆さんにご確認頂きます。

その後この修正版を元に来月にはP Iを実施しまして、地域の皆さんのご意見等を聴取し、再度これらをふまえ、目指すべき将来像につきまして修正を加えていきます。

次回6月に予定しております第3回委員会で、この再修正版を元に議論を行うとともに、具体的な方策等についてご意見を頂戴する予定であります。

その他に関しては、資料5の通りでございますが、議事録につきましては、前回同様、後日委員の方々に確認させていただきます。事務連絡としては以上です。

**小磯委員長** ということで、あとはよろしいですね。第2回の委員会を終了したいと思います。今日は皆さんどうもありがとうございました。

<第2回釧路根室地域将来像検討委員会終了>